

## 短大生の新聞への接触度と信頼度 ～アンケート調査から～

廣 瀬 千 尋

### Frequency of Contact with, and Degree of Trust in Newspapers among Junior College Students ～Questionnaire Results～

Chihiro HIROSE

#### 1 はじめに

現在，わが国は世界有数の新聞大国である。『ユネスコ文化統計年鑑』1992年版によると，1990年現在の国別新聞総発行部数の第1位は旧ソ連の1億3776万部で，2位は日本の7252万部だが，その後のソ連邦解体でかつて1000万部以上を発行していた共産党中央機関紙や政府機関紙は半分以下に減少しており，日本がロシアを上回っているのではないかと見られる。またわが国の新聞普及度は人口1000人当たり587部でノルウェーの614部に次ぎ世界第2位。1世帯当たり1.2部となっている。

このように新聞の普及度は飽和状態とっていいほどだが，近年しきりに“活字離れ”がいわれるようになった。一般教育科目の「マスコミュニケーション」担当者として気になるところである。そこで学生たちがどの程度新聞を読んでいて，かつどれくらい新聞を信頼しているかを確かめるため，1997年9月，「マスコミュニケーション」受講生，及び非受講生を対象にアンケートを行った。以下に，その結果をまとめてみた。

#### 2 調査対象と内容

対象は「マスコミュニケーション」受講生42名（1，2年生＝以下「受講生」）と，比較対象としてのこの講義を受講していない英語科学生60名（1年生＝以下「非受講生」）の計102名。

アンケート内容は表1の通りで，問1から問5までは新聞への接触の度合いを，問6以下は新聞報道に対する評価を問うものである。またその結果を，日本新聞協会研究所が定期的に行っている「全国新聞信頼度調査」の第12回分（1997年5月実施）のなかの学生に関するデータと比較し，本学学生の位置づけを試みた。

表1 アンケート内容

- 問1 あなたは新聞を読んでいますか。  
毎日読む 時々読む ほとんど読まない
- 問2 (読んでいる人に) 読む時間は一日平均何分くらいですか。  
分
- 問3 (読んでいる人に) ふだんよく読む記事はどれですか。(複数回答)  
テレビ欄・番組紹介 社会記事 地域ニュース  
スポーツ 国内政治 国際政治・海外ニュース  
天気予報 医療・健康 投書・相談 女性・家庭・育児・教育  
娯楽・レジャー・趣味 社説 経済 写真・グラフ面  
文化・学問・芸術 漫画  
その他 ( )
- 問4 (読まない人に) 新聞を読まない理由はどれですか。  
読む必要を感じない 字を読むのがめんどろ  
時間がない 購読料が惜しい テレビで間に合う  
その他 ( )
- 問5 あなたは一日平均どのくらいテレビを見ますか。  
時間 分  
(以下、問12まで読んでいる人だけ)
- 問6 新聞は世の中の出来事を正確に報道していると思いますか。  
① している ② まあまあしている ③ どちらともいえない  
④ あまりしていない ⑤ していない
- 問7 新聞は社会の一員として当然知っていなければならない情報を、十分に提供していると思いますか。  
① している ② まあまあしている ③ どちらともいえない  
④ あまりしていない ⑤ していない
- 問8 新聞はあなたの日常生活に役立つ身近な情報を、十分に提供していると思いますか。  
① している ② まあまあしている ③ どちらともいえない  
④ あまりしていない ⑤ していない
- 問9 新聞はいろいろな立場の意見を、公平に取り上げていると思いますか。  
① 取り上げている ② まあまあ取り上げている  
③ どちらともいえない ④ あまり取り上げていない  
⑤ 取り上げていない
- 問10 新聞の記事は興味本位に流れず、品位を保っていると思いますか。  
① 保っている ② まあまあ保っている ③ どちらともいえない  
④ あまり保っていない ⑤ 保っていない
- 問11 新聞は報道される人のプライバシーや人権に気を配っていると思いますか。  
① 配っている ② まあまあ配っている ③ どちらともいえない  
④ あまり配っていない ⑤ 配っていない
- 問12 ひとことでいって、現在の新聞は信頼できると思いますか。どうですか。  
① 信頼している ② まあまあ信頼している ③ どちらともいえない  
④ あまり信頼していない ⑤ 信頼していない

### 3 閲読程度

「毎日読む」は受講生が38.1%，非受講生35.0%とわずかに受講生が勝っているものの、その差は極めて小さい。しかし「時々読む」と答えたものは受講生の54.8%に対し、非受講生は43.3%と目立った違いがでた。さらに「ほとんど読まない」に至っては、受講生が7.1%であるのに非受講生では21.7%にのぼった。(図1)

両集団を合わせた結果から推測すると、全学生の三分の一強(36.3%)は毎日、新聞に触れるが、半数近く(48.0%)は時々しか新聞を読まず、15.7%の者は新聞と無縁の生活を送っていることになる。

なお、読まないと答えた16名の読まない理由は「読むのがめんどろ」5名、「テレビで間に合う」3名。これに「新聞をとっていない・必要を感じない」3名を加えると、いわゆる“活字離れ現象”が浸透しつつあるのを感じさせる。残りは「(読む)時間がない」4名、「購読料が惜しい」1名であった。

一方、日本新聞協会研究所の全国調査によると、学生の「毎日読む」は38.0%、「時々読む」48.0%、「ほとんど読まない」14.0%となっている。従って、本学学生の新聞閲読程度は全国の学生より「毎日読む」が1.7%少なく、「ほとんど読まない」が1.7%多いだけで、学生として平均的な閲読程度ということになる。

### 4 閲読時間

毎日読む・時々読むもの合わせて、一日の平均閲読時間は3分から60分までの範囲内にある。両集団を合わせた平均閲読時間は11.0分で、「30分未満」が89.0%、「30～60分」が11.0%、「1時間以上」はなかった。全国調査の学生の閲読時間は平均で24.9分、「30分未満」は52.0%、「30～60分」が38.0%、「1時間以上」10.0%。全般的に本学学生の閲読時間は短い。

集団別に見ると、受講生では「30分未満」が83.3%、「30～60分」が16.7%なのに対し、非受講

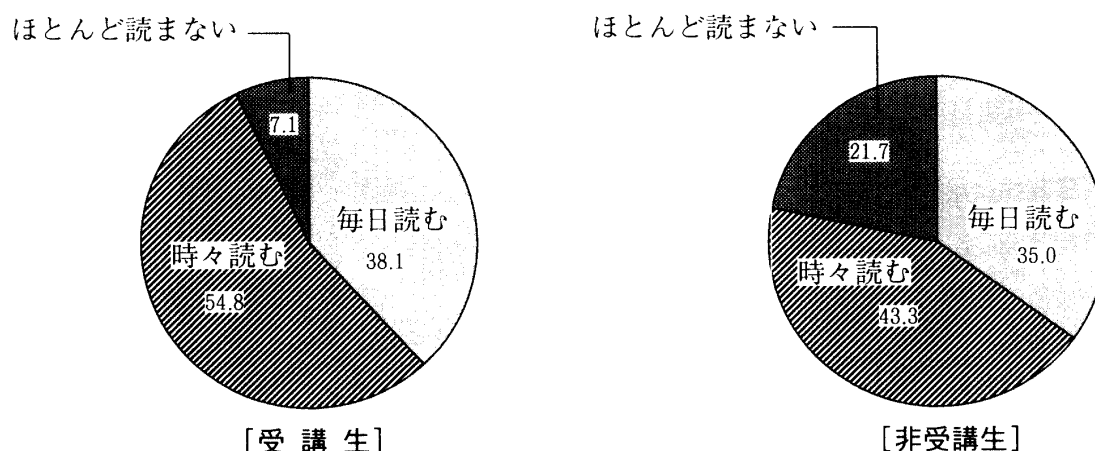


図1 新聞閲読程度(数字はパーセント)

生では「30分未満」が93.5%、「30～60分」は6.5%とそれぞれ約10ポイントの差が出た。(図2)

さらに受講生の最大値が「60分」(2名)だったのに対し、非受講生の最大値は「30分」(3名)どまりと顕著な差がある。また、もっとも多かったのは、受講生が「10分」と「20分」の各22.2%であるのに対し、非受講生では1位が「10分」の34.8%、2位は「5分」の28.3%だった。集団別の1人当たり平均閲読時間は、受講生が16.75分、非受講生が11.18分で、6分近い差がある。

## 5 閲読記事

では、両集団で読む記事に違いがあるのだろうか。新聞記事を社会記事、スポーツ、社説など17のジャンルに分け、ふだんよく読む記事をチェックしてもらった。結果は表2の通り。1位は両集団とも断然「テレビ欄・番組紹介」で、受講生の100%、非受講生の97.9%が読んでおり、2位以下を大きく引き離している。中にはテレビ欄しか読まない者もいる。2位以下は受講生では②「社会記事」と「地域ニュース」で閲読率は共に46.2%、④「天気予報」41.1%、⑤「スポーツ」と「国際政治・海外ニュース」各25.6%、⑦「娯楽・レジャー・趣味」23.1%、⑧「文化・学問・芸術」20.5%、⑨「女性・家庭・育児・教育」と「漫画」の各18.0%、⑪「投書・相談」15.4%、⑫「社説」12.8%、⑬「医療・健康」と「写真・グラフ面」の各10.3%で、以上が10%以上の閲読率を獲得した項目。

一方、非受講生は②「天気予報」53.2%、③「社会記事」46.8%、④「スポーツ」と「国際政治・海外ニュース」の各29.8%、⑥「地域ニュース」と「娯楽・レジャー・趣味」の各27.7%、⑧漫画10.6%で、その他の記事の閲読率はひと桁台にとどまる。

これで見ると、学生は第一にテレビ番組や天気、住んでいる地域など日常生活に直接かかわる情報を新聞に求め、ついで関心あるいは興味があるスポーツ、娯楽などの情報入手に新聞を利用しているという構図が浮かびあがる。そして両集団を比較すると、非受講生の閲読対象が比較的狭いジャンルに限定されているのに対し、受講生の方は興味を抱いている範囲が非受講生よりも広いことがうかがえる。受講生と非受講生で差が大きかったのは、「地域ニュース」の46.2%対27.7%、「文化・

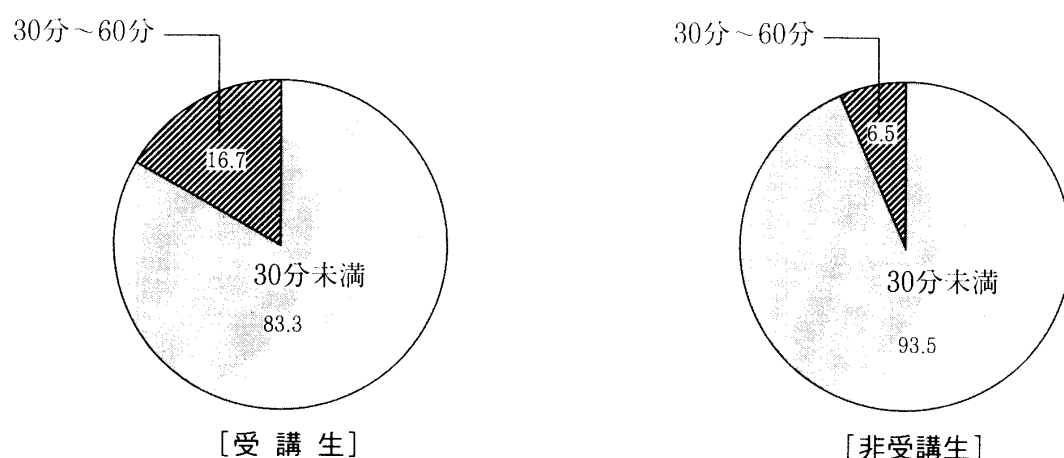


図2 新聞閲読時間 (数字はパーセント)

学問・芸術」の20.5%対6.4%など。概して受講生の閲読率が非受講生のそれを上回ったが、「天気予報」「海外ニュース」「娯楽・レジャー・趣味」「スポーツ」では非受講生の閲読率の方が高かった。なお、両集団を通してもっとも敬遠されたのは「経済」記事で、これを閲読対象として挙げたのは1名ずつだった。「国内政治」も受講生がゼロ、非受講生は2名で、「社会記事」には両集団とも半数近くが日を通すのに対し、いわゆる硬派記事にはほとんど関心がないことを示している。

その一方で「国際政治・海外ニュース」が比較的上位を占めているのは、この調査がダイアナ元英国皇太子妃の事故死（8月31日）から間もない時期で、その続報が連日紙面を飾っていたためと思われる。

表2 ふだんよく読む記事（数字はパーセント）

記 事	受 講 生	非受講生
テレビ欄・番組紹介	100	97.9
社会記事	46.2	46.8
地域ニュース	46.2	27.7
スポーツ	25.6	29.8
国内政治	0	4.3
国際政治・海外ニュース	25.6	29.8
天気予報	41.1	53.2
医療・健康	10.3	4.3
投書・相談	15.4	8.5
女性・家庭・育児・教育	18.0	8.5
娯楽・レジャー・趣味	23.1	27.7
社説	12.8	8.5
経済	2.6	2.1
写真・グラフ面	10.3	8.5
文化・学問・芸術	20.5	6.4
漫画	18.0	10.6
その他（運勢・広告）	10.3	2.1

## 6 テレビ視聴時間

同じマスメディアであるテレビへの接触度を知るために、問5を設けた。ただし、聞いたのは視聴時間のみでその内容は訊ねていない。予想通り、新聞とは比べものにならない長い時間をテレビ視聴にあてている。（図3）最短の10分（両集団とも1名ずつ）から最長の6時間（1名）までバラツキがあるが、一日の平均視聴時間は受講生が112.6分、非受講生が132.5分で20分の差があった。全国調査では、学生の平均視聴時間は139.8分で、これは本学学生の方が短い。

以上を総合すると、学生が新聞を読む時間は一日平均11.0分なのに対し、テレビの視聴には124.3分を当てており、情報入手のメディアとしてのテレビの絶対的優位性は明らかである。こうした傾向はけして特異なものではなく、全国調査でも、学生の新聞閲読時間は一日平均24.9分なのに対し、テレビ視聴時間は139.8分である。ただし、本学学生のテレビ視聴時間と新聞閲読程度は全国的調査と大差ないが、新聞閲読時間は半分以上にとどまっている。全国調査の学生は四年制大学生も含み、従って男性も入る（全国調査の性別データによると、閲読程度・閲読時間ともに全年代を通して女性より男性の方が長い）にしても、気になるところではある。

つぎに「マスコミュニケーション」受講生と非受講生との比較では、受講生の方が新聞閲読時間

が非受講生より長く、かつ閲読範囲が非受講生より広範に及んでいる。反面、テレビ視聴時間の方は非受講生の方が受講生より20分程度長くなっている。また、新聞をほとんど読まないものの割合は、非受講生では受講生の約3倍にのぼる。

この結果と、「マスコミュニケーション」の受講者を対象とした付帯調査として「『マスコミュニケーション』を受講した理由」を尋ねたのに対し、「マスコミに関心があるから」と答えた者が62%を占めたことを考えあわせると、マスコミュニケーションに関心を抱いている学生は、情報の入手源として映像を第一としながらもそれだけに頼らず、活字の持つ機能も認識して利用しようとする傾向がうかがえる。

この講義の担当者としては今回の調査結果を踏まえて、今後はテレビの視聴内容とその評価、書籍・雑誌に対する接触度と評価など調査を広げたいと考えている。

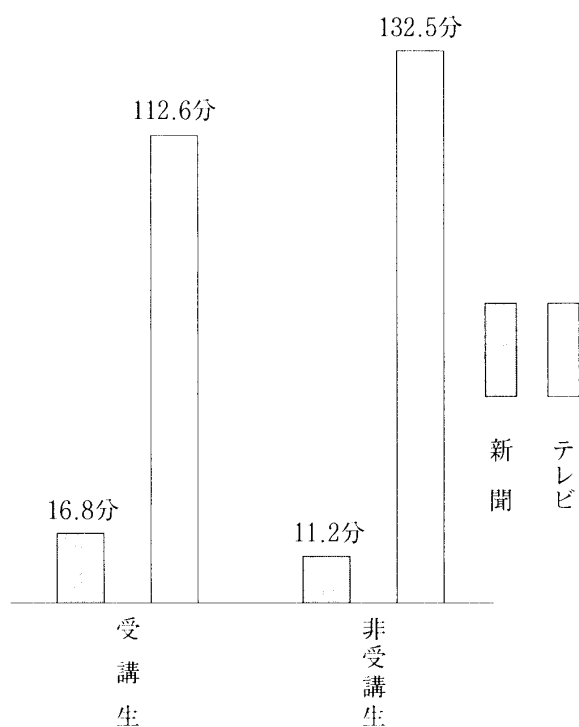


図3 新聞閲読時間とテレビ視聴時間（平均）

## 7 新聞信頼度

質問内容は表1の問6から問12までの7項目、即ち新聞の「正確性」「社会性」「日常性」「公平性」「品位性」「人権配慮」「信頼性」について評価を求めるもので、質問項目及び回答方法（各項目ごとに①積極的肯定②消極的肯定③中立的評価④消極的否定⑤積極的否定の5つの選択肢から選んでもらう）は、日本新聞協会研究所の方式を踏襲した。

既に見たように、本学学生の新聞閲読時間は全国の学生のそれより短い。そのため、この7項目に対する回答への信頼性にいささかの懸念がなくもないが、閲読時間が短くとも目を通すからには、書かれたものについて何らかの評価が生ずるはずであるとの観点から、取り上げることとした。

7項目ごとの受講生、非受講生の評価は図4の通りである。以下、項目ごとに検討してみる。なお、各項目共数名の無記入者があったが、これらは全国調査にならって「中立的評価」に加えた。

《正 確 性》 受講生の2.4%が積極的肯定、52.4%が消極的肯定で、過半数が新聞は世の中の出来事をおおむね正確に報道していると思っている。非受講生の肯定派は積極的肯定8.3%、消極的肯定38.3%で、両者を合わせても過半数に達しない。一方、消極的否定は受講生の2.4%に対し、非受講生は10.0%と多い。また、積極的否定は共にゼロ、中立的評価はほとんど差がなかった。

受講生・非受講生ともに積極的否定がなかったのはこの項目だけで、「正確性」に関してはおしなべて肯定的といえよう。そして受講生の方が非受講生よりも肯定的である

といえる。

《社会性》 受講生の積極的肯定派が7項目中最大値(26.2%)となった。消極的肯定派も45.2%と多数で、両派合わせると71.4%が「新聞は社会の一員として知っていなければならない情報を提供している」と評価している。これに伴って否定的評価はゼロだった。

この傾向は非受講生も同様で、積極的肯定は18.3%と「日常性」に関する積極的肯定の19.0%について多く、消極的肯定は45.0%で7項目中最大となった。両派合わせると63.3%で、非受講生の肯定的評価はこの項目がもっとも多い。しかし、積極的否定派が16.7%を占め受講生と際立った違いを見せている。

《日常性》 この項目も肯定的評価が多かった。受講生の19.0%、非受講生の16.7%が積極的肯定派で、これはともに「社会性」につぐ多さ。そして受講生の42.9%、非受講生の28.3%が消極的肯定派だった。しかし、否定的評価では、受講生では消極的否定が9.5%、積極的否定はゼロだったのに対し、非受講生では消極的否定が13.3%、積極的否定は21.7%に達した。非受講生の否定的評価35.0%はこの項目が最大。

受講生と非受講生のこの差は、どこから生じるのだろうか。「日常性」にかかわる記事としては、「テレビ欄・番組紹介」「社会記事」「地域ニュース」「医療・健康」「女性・家庭・育児・教育」などが考えられるが、このうち初めの2項目を除いては両集団の間で閲読程度にかなりの差があることがこの違いとなって現れたのかとも考えられる。あるいは非受講生にとっての「日常性」は新聞が提供する類のものではなく、若者の読者が多いタウン誌やテレビ番組紹介誌のそれがイメージされているのかもしれない。

《公平性》 7項目中で唯一、両集団とも積極的肯定が皆無だった。消極的肯定も受講生は19.0%、非受講生は26.7%と上記3項目に比べると少なく、代わって中立的評価が両集団とも過半数を占めた。一方、消極的否定は受講生が14.3%、非受講生が16.7%と比較的接近しており、積極的否定は7.1%と1.6%だった。全項目を通して受講生の積極的否定が非受講生のそれを上回ったのはこれだけで、しかもその差がかなりある。公平性についての評価は厳しいといえよう。

《品位性》 これも両集団とも中立的評価が過半数を占め、「公平性」に似た分布状態を見せている。非受講生の中立的評価61.8%は7項目中最大である。「公平性」と異なるのは、両集団ともに少ないながら積極的肯定派が存在する(受講生4.8%、非受講生3.3%)点。また、全体的に消極的否定は非受講生が受講生を上回る傾向があるが、ここではそれが受講生19.0%、非受講生8.3%と逆で、しかもその差が比較的大きい。

《人権配慮》 やはり中立的評価が占める割合が高い(受講生54.8%、非受講生48.3%)。肯定的評価は受講生が26.1%、非受講生21.7%と、受講生の方が多く、否定的評価は逆に受講生19.1%、非受講生30.0%で、非受講生の否定的評価は「日常性」について高かった。

《信頼性》 この質問内容は「ひとことでいって、現在の新聞は信頼できると思いますか。どうですか」というもので、上記6項目を総括する結論的な問いかけ。これに対し受講生は7.1%が積極的肯定、50.0%が消極的肯定で、肯定派が過半数に達したのに対し、非受講生は積極的肯定3.3%、消極的肯定36.7%で計40.0%にとどまり、明らかな違いをみせた。

中立的評価は受講生35.7%、非受講生50.0%。非受講生の方は判断を下すのをためらっ

ている者が多いのではないかとと思われる。そのことは、受講生では消極的否定4.8%、積極的否定2.4%なのに、非受講生は消極的否定10.0%だけで積極的否定が皆無だったことにも現れているようだ。

7項目の検討結果をまとめると、両集団とも「正確性」「社会性」「日常性」「信頼性」に関しては肯定的評価が優る（ただし非受講生の「信頼性」は中立的評価の方が優る）が、「公平性」「品位性」「人権配慮」の各項目では中立的評価が過半数（非受講生の「人権配慮」の中立的評価のみは48.3%で過半数に達しないが）を占め、残りは肯定的評価と否定的評価にほぼ2分されるという大まかな色分けとなる。新聞ジャーナリズム本来の機能的部分に関しての評価はいいが、比較的最近求められるようになった機能に対する評価はあまり高くないといえるかもしれない。

また全般的に受講生の方が新聞報道のあり方に対して肯定的であり、非受講生では反対に否定的な見方をする傾向がうかがえる。その違いは、肯定的評価では「日常性」（その差は16.9ポイント）と「信頼性」（同じく17.0ポイント）で顕著であり、否定的評価では「社会性」（同じく16.7ポイント）、「日常性」（同じく25.5ポイント）で著しい。また、受講生では「正確性」「社会性」「日常性」の3項目で積極的否定はなかったのに対し、非受講生では「正確性」「信頼性」の2項目で積極的否定は見られないという違いが出た。

前述の通り、受講生と非受講生では閲読時間、閲読範囲に差があり、そのことが両集団の違いとなっていると考えられる。その意味で新聞に対する接触度が高いほど新聞への信頼度が増し、接触度が低いと信頼しない“食わず嫌い”になるのではないかとと思われる。

以上の結果を日本新聞協会研究所の学生についての調査結果と比較すると、全国の学生も「正確性」「社会性」「日常性」「信頼性」の4項目は肯定的評価が過半数を占めほぼ似た傾向にあるが、それらの数値は本学学生より概して高く（例えば「正確性」に関しては積極的肯定4.0%、消極的肯定58.0%）本学の受講生の数値に近い。異なるのはその他の3項目で、「公平性」に関して全国学生は否定的評価が60.0%にのぼり、肯定的評価の28.0%を大きく上回っている。「品位性」では全国学生の肯定的評価は52.0%と過半数を占め、否定的評価は36.0%。「人権配慮」は肯定的評価48.0%、否定的評価44.0%とはほぼ拮抗している。

これら3項目に関して本学学生の場合中立的評価が大半を占めているのに対し、全国学生では中立的評価は多くても12.0%（「公平性」と「品位性」）どまりである。これは他の項目についても同様で、中立的評価のパーセンテージは全国の学生は低い。本学の学生の場合、新聞接触度の低さがこうした違いを招いたのかもしれない。

## 8 信頼得点

これも新聞協会研究所にならって行った。前記5段階評価を回答百分率にして、分布比率1%につき、積極的肯定をプラス2点、消極的肯定をプラス1点、消極的否定をマイナス1点、積極的否定をマイナス2点、中立的評価を零点とした加重平均を「信頼得点」として算出した。この得点のもつ意味を同研究所では以下のように定めている。

80点以上＝否定的、批判的評価の割合はきわめて小さく、この評価を得た側面は絶対的に信頼されている（絶対信頼派）



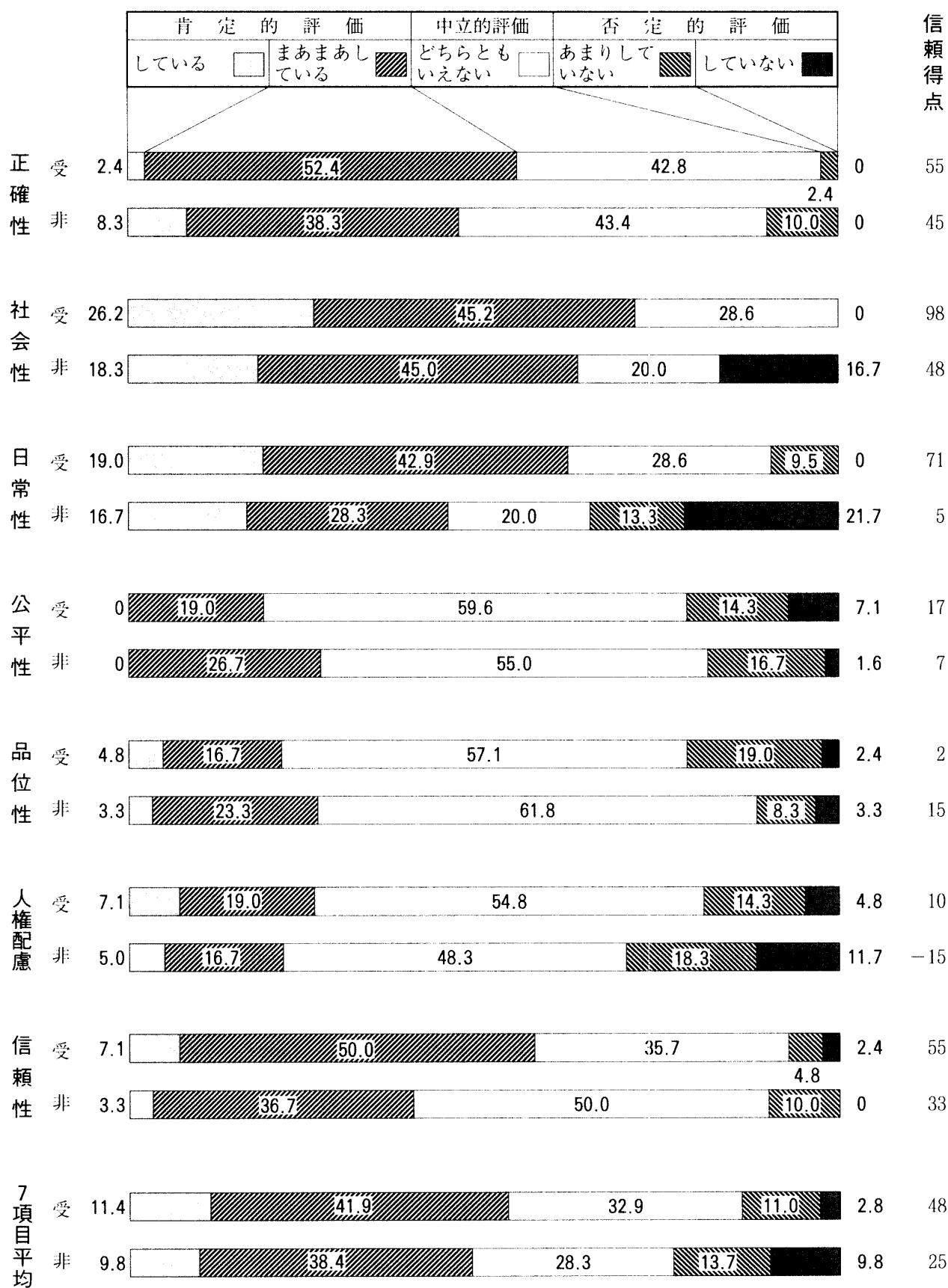


図4 新聞信頼度の各項目に対する評価

50～80点未満＝否定的、批判的な評価をくだす割合がやや目立ってくるが、まだ肯定的、好意的評価がかなり上回っている（信頼派）

30～50点未満＝否定的、批判的な見方が無視できない割合で存在するが、全体としてはまだ肯定的、好意的な側に傾いている（中間派）

0～30点未満＝肯定的、好意的評価と否定的、批判的评价が拮抗しながらもまだ多少、肯定・好意側に傾き気味である（批判派）

得点マイナス＝肯定的・好意的な態度、評価よりも否定的・批判的な態度、評価のほうが上回っている（不信派）

本学学生の各項目の信頼得点は図4の右端に示した。最高得点は「社会性」に対する受講生の98点で、絶対的信頼を得ていることになる。これに対し非受講生は48点と大きな差があるが、これは非受講生としてはやはり最高得点で、社会性については両集団とも肯定的であるといえる。これについて受講生が高い評価を与えたのは「日常性」の71点だが、同じ項目に対し非受講生は7点と著しい違いを見せた。非受講生の否定的評価がこの項目でもっとも多かったためだが、両集団の差はこれが最大である。

「人権配慮」に関しては、非受講生の得点はマイナスとなった。受講生の得点も10と低く、新聞にとって厳しい結果といえよう。総じて受講生の信頼得点が非受講生のそれを上回っているが、「品位性」だけが受講生の2点に対し、非受講生が15点と逆転している。この差は主に受講生の消極的否定の多さから生じている。

なお、全国の学生の信頼得点では「公平性」がマイナス48点と極めて厳しく「人権配慮」もマイナス2点だった。これらの項目では他の職業人に比べて学生の評価が厳しいのは、“正義”に対する若者の感受性の鋭さからかと思われる。

7項目平均の信頼得点は、受講生が48点、非受講生が25点。上記分類に従えば本学の受講生は「中間派」、非受講生は「批判派」ということになる。

## 参 考 資 料

「新聞研究」1997年9月号（社団法人・日本新聞協会）

「図説日本のマスコミュニケーション」第3版（藤竹暁・山本明編，日本放送出版協会）

[1997年11月29日受理]